

●ビジネスデータサイエンス学部 2025年4月誕生

未来を切り拓く データサイエンティストを育成

アクティブラーニングで実践的なビジネス力を養う

■座談会・新学部開設
鷺尾 隆 ・ ビジネスデータサイエンス学部長(就任予定)
現 関西大学商学部教授
矢田 勝俊 ・ ビジネスデータサイエンス学部 教授(就任予定)
現 関西大学商学部教授
鎌田 真由美 ・ ビジネスデータサイエンス学部 教授(就任予定)
日本マイクロソフト株式会社
ソリューションアーキテクトチャーター本部長



■座談会：新学部開設 — 1
■研究最前線 / Research Front Line
運動パフォーマンスと認知機能の向上を研究
健康の維持・増進、
「体操×マウスリンス」という最適解 — 7
人間健康学部 — 弘原海 剛 教授
• Maintaining and improving health -
"Exercise x Carbohydrate Mouth Rinse"
as the optimal solution
Faculty of Health and Well-being
— Professor Tsuyoshi Wadazumi
■リーダーズ・ナウ — 11
卒業生 — フラワークリエイター 森 俊弥 さん
在学生 — 法学部 3年次生 鳥井田 稔仁 さん
関西大学体育会「KAISERS」
■トピックス [学内情報] — 17
UHA 味覚糖の人気グミ「コロロ」とのコラボ商品
関大生がパッケージを手掛けた
「関大コロロ」を限定販売 ほか
■社会貢献・連携事業 — 18
宮内庁宮内公文書館・堺市博物館・関西大学共催
企画展「仁徳天皇陵と近代の堺」を開催 ほか
■関大ニュース — 19
パリ2024オリンピック・パラリンピック ほか

■座談会：新学部開設

ビジネスデータサイエンス学部 2025年4月誕生

未来を切り拓く データサイエンティストを育成

アクティブラーニングで実践的なビジネス力を養う



鷺尾 隆

●ビジネスデータサイエンス学部長(就任予定)
現 関西大学商学部教授

矢田 勝俊

●ビジネスデータサイエンス学部 教授(就任予定)
現 関西大学商学部教授

鎌田 真由美

●ビジネスデータサイエンス学部 教授(就任予定)
日本マイクロソフト株式会社ソリューションアーキテクト本部長

2025年4月、関西大学はビジネスデータサイエンス学部を新設します。学びの舞台は吹田みらいキャンパス。今号では、学部長に就任予定の鷺尾隆教授と、教授着任予定のお二人の矢田勝俊教授、鎌田真由美さんが、新学部を目指す教育、育成したい人材像などについて語り合いました。

◆データ活用力が国の未来を決める

——最初に鷺尾先生から、関西大学がビジネスデータサイエンス学部を開設するに至った社会情勢についてお話しいただけますか。
鷺尾 世の中の動きとして、まず、データの重要性が増えています。よく言われることですが、20世紀の重要な資源は石油だったが、21世紀はデータだ。いろいろな企業がデータを中心に大きなビジネスを起し、一国の経済を左右するような大きな力になっている。データをうまく扱い、いかに我々の生活に応用していけるかが、その社会が栄えていけるかの大きな境目、分水嶺になっているということです。

スイスの国際経営開発研究所(IMD)が発表した「世界デジタル競争力ランキング2023」によると、日本は「ビッグデータとアナリティクスの活用」の項目において、調査対象国で最下位の64位です。そのぐらい日本はデータの利用が遅れている。この状況を引き起こしている原因は、圧倒的な人材不足です。

データを扱える人材を日本社会の中でどんどん輩出していかねばならない。さらに世界で活躍できる人材を増やしていかなければならない。そうしないと日本の経済は浮上せず、世界の中の日本のプレゼンスも向上しないでしょう。人材育成がやはり一番の鍵だと思います。それがひいては我々の日常生活の水準、豊かさにつながります。そういう意味で、このビジネスデータサイエンス学部は世界にとって非常に重要な教育機関となると信じています。

この学部では、マーケティング、経営およびデータサイエンスの知識を学ぶだけでなく、その知識を生かした実践的な学びを通じて、即戦力となる能力を身に付けた人材を育てます。

カリキュラムにおいて、最も重視するのがアクティブラーニングです。1年次生から座学の講義と同時並行で、アクティブラーニングによる学習をしていきます。

矢田 実践的な学びを1年次生からすることで、面白い人材が育つと思いますね。本を読んで、深い知識を身に付けることが、大学教育では伝統的に大事とされてきました。確かに深い知識は必要ですが、知識があっても、使えなければ意味がない。

ビジネスの現場では話を通じないような相手とも仕事をしなければならない場面が必ずあります。そういう現実を全く考えずに、知識だけを教える教育は違うなと思います。知識やスキルだけでなく、実社会の現実とも向き合いつつ、多様な人と協働していく、



そういったものをトータルに融合した教育を実現したいという思いが、この学部を創設するに至った理由の一つだと思います。

◆多様な個性と本音で協働する体験を

鷺尾 本学部の特色の一つは、多様性だと思っています。だから、教員も多様でなければならない。産業界で経験を積んできた方、アカデミアでやってきた方、両方にまたがって活動してきた方、そういった多様な先生方が集まっています。

また、学生には大学にいる間から、さまざまなバックグラウンドを持つ仲間と協働する経験を積んでもらいたいと思います。そのためにも多様な学生に入学していただきたい。

矢田 多様性とチームビルディングは、全学年を通じてこの学部の大きなテーマになっていくでしょう。各ゼミの演習実習の中でも、小グループに分かれてそれぞれで助け合いながら取り組んでもらう予定です。

ただし、仲良くやればよいというものではありません。本音のぶつかり合いをしてほしい。それができるのは大学までなんです。今どきの学生を見ると、みんな性格が良く、優しく、口喧嘩もしない。それでは駄目なんですよ。ぶつかり合いながら状況を突破しないと実現できないことがあると思うんです。だから、4年間かけていろいろな人とチームを組み、さまざまな経験をして、耐性を付けて、社会に出てほしい。ストレスはかかるけれど、それが大事なんじゃないかと、教員として四半世紀、学生を見てきて思うことです。

BUSINESS DATA SCIENCE

■座談会：新学部開設



矢田 勝俊—やだ かつとし
 ■ビジネスデータサイエンス学部教授(就任予定)。関西大学商学部教授。神戸商科大学大学院経営学研究科博士後期課程修了。大学院時代から複数の企業で情報化の現場経験を積む。関西大学DSI (Data Mining and Service Science for Innovation) プログラム統括責任者。関西大学データサイエンス研究センター所長。

この学部では人とのつながり方と、それを通して、夢を実現するために欠かせないITを学んでもらい、たくましく生き残る人間を育てていきたいと思っています。



鷺尾 隆—わしお たかし
 ■ビジネスデータサイエンス学部長(就任予定)。関西大学商学部教授。東北大学工学部卒業。東北大学大学院工学研究科博士後期課程修了。産業技術総合研究所人工知能研究センターNEC-産総研人工知能連携研究室室長。大阪大学KOBELCO未来協働研究所所長。三菱総合研究所でコンサルタントとしての実務経験がある。

なんだか数学的、科学的なきれいなことをやるのではないか、というイメージを持たれる方もいると思いますが、多分やることはかなり人間臭い、泥臭いことになるんじゃないかな。

情報の核心を見極める問いを心に置いて、人間として生き抜いていくための力を養う場に、この学部がなればうれしいです。



鎌田 真由美—かまた まゆみ
 ■ビジネスデータサイエンス学部教授(就任予定)。横浜国立大学教育学部卒業後、日本IBM株式会社入社。勤務と並行し、筑波大学大学院で経営システム科学修士、東京大学大学院で学術博士を取得。2013年より日本マイクロソフト株式会社勤務、ソリューションアーキテクトチャーター本部長。

良いタイミングで設立されることになったなと感じています。
 鎌田 最近の生成AIプロジェクトにおいては、プロンプトをどう書くかが重要になっています。開発者やユーザーが「こんな状況で、こういうことを知りたい・こんな結果が欲しい」といったプロンプトを書いて投げると、AIがそのプロンプトを解釈して回答を出してくれる。ただし、返ってきた回答の中には事実ではないことも入っているので、そこは見破らなければならない。そこで求められている能力は、今までは変わってきていて、コンテキストを正しく伝えることや、コンピュータの返した回答を検証する力などが重要になってきていると感じています。
 鷺尾 ガラッと変わってきていますよね。
 鎌田 企業も一生懸命、人材育成しているところですが、これまでのやり方での学びだけではなく、生成AIなどに適応する能力が求められるようになってきています。
 鷺尾 授業の中で大規模言語モデルを積極的に使っていかなければと考えていますが、そのためにどういう講義にしていこうかは、これからさらに追求していかなければならない。見本はないんですよ。
 矢田 教える側の意識も変えていかなければならない。この間、教員同士の反省会で、学生も自分と同じようにコンピュータが好きだという前提でプログラミングを教えてしまっていないかという話がありました。今後は、コンピュータが好きじゃない学生も絶対に一定の割合でいるということを踏まえて教え方を勉強していく必要があります。
 鷺尾 教員も本当に勉強しながらやっていくしかないですね。教え方も内容もどんどん変わっていくと思います。最新の成果も常に取り入れていかざるを得ないでしょう。

◆企業との連携でリアルな課題解決力を育む

鷺尾 アクティブラーニングでは、いろいろな企業の実際の困り事、悩みを課題にして、学習することを考えています。そのためにさまざまな企業と連携することが必要で、その交渉も、これからさらに増やしていく必要があると思っています。
 矢田 現場の企業で働く方の熱意を感じられることで、学生は「私も何か力になりたい」とモチベーションが高まって、頑張れる。そういう、企業にとっても有益で、学生のやる気に火を付けるシチュエーションを用意できるよう工夫していきたい。

◆ダイナミックに成長し続けるこの学部には完成はない

鷺尾 2025年4月に学部が発足する時点で、準備が100%できていることはあり得ないし、それを目指してはいません。これはいいかげんに不完全な形で出発するという意味ではなく、入学してくる学生のために、最善を尽くしてやろうとするからこそ、完成した状態でスタートすることはないと思っています。学生も成長するけれど、学部としても常に成長し続けなくてはならない。そのスタートが2025年の4月だということです。学部というものは未完成なもので、常にダイナミックに変わっていかなければならない。
 鎌田 私が経験してきたAIの開発も同じことが言えます。ゴールを最初に決め切るのが難しい。やっている間に、ゴールが先へ先へ

と行ってしまう。まさにそういう探索と適応を素早く繰り返すアジャイルな学部として、常にどんどん先へ進んで、気が付いたらるか遠くまでたどり着いていたということになればいいなと思います。あえて「よし、終わった」とせず、常にゴールはまだ先だという状態を続けるのは、大学や学部にとって良いことだと思います。
 鷺尾 留まらないで変化し続けることが、特にこの分野の学部としては必要だと思いますね。それが学生のためでもあると思います。

◆AI時代に適応した新しい学びの形を探求して

矢田 勉強の仕方も随分変わってきています。今の学生は教科書を読まずにYouTubeを見ているから、それも早送り。それは浅い知識だとも思いますが、でも知識はどう使うかが問題で、その方

法で実践的に学習できるのなら、効果のある勉強の仕方と言えます。
 鷺尾 プログラミングの勉強の仕方も、ここ数年で急激に変わりつつあります。昔だったらまず基礎的なコマンドを覚えて、それからどう組み合わせればどんなプログラムを書けるかを、コツコツ積み上げて勉強するのが常識でした。ところが、最近の学生の勉強の仕方は、まずChatGPTに書かせてみて、それを眺めて勉強していく。あるいは実際に動かしてエラーが出たら、その原因を調べる。そういった経験を積み上げて、プログラミング言語を習得するという方法に変わってきている。まだ大学の講義がそこまでついていってはいませんが、その方が効率が良いし、身に付く。このように、勉強の仕方が変わる時代にちょうど今差し掛かっている。そういう意味で、ビジネスデータサイエンス学部は、



■座談会：新学部開設



鎌田 これまで私が仕事で相談を受けた企業とのやり取りの話をすると、データはあるけれど、これを使って何がしたいかが明確でなく、ぼんやり何かできるよね、みたいな感覚を持っている方が結構いるんです。その状態で自らが背景を知り、さらに一歩踏み込まないと、先に進むことはできない。

今までの大学教育の主流は、きれいに用意されたサンプルデータと解き方があり、そこからスタートする学びだったと思いますが、この学部は違うことを目指している。そこが、重要だという気がします。

鷲尾 これからは問いを立てる力が、ますます重要になってくる。あとはまさに本学が掲げている「考動力」、考えて動く力ですね。アクティブラーニングにおいても、データを企業からご提供いただいたら、解決すべき課題をそのデータから探すところから取り組める学生が育ってくれるといいなと思います。

学部名にデータサイエンスという言葉を含んでいるから、なんだか数学的、科学的なきれいなことをやるのではないかと、というイメージを持たれる方もいると思いますが、多分やることはかなり人間臭い、泥臭いことになるんじゃないかな。

矢田 うちの大学のカラーにもそういうものが合うと思います。関西大学はドロドロの難しい状況であっても、とにかく突破して、活躍している卒業生がビジネスシーンにたくさんいます。そういう力を育てる学部は本学の伝統によくマッチしていると思います。

——最後に、受験生、保護者、学校関係の方へのメッセージをお願いします。

鎌田 私はずっとビジネスの世界にいて、近年はAIとデータ分析、DXといったプロジェクトが増えてきています。そこで感じたのは、世界には加工され解釈された情報やデータが溢れていて、それをあまりにもナイーブに受け入れている若者が多いのではないかと。情報の核心を見極める問いを心に置いて、人間として生き抜いていくための力を養う場に、この学部がなれればいいです。
矢田 私たち教員としては、学生に幸せになってもらいたい、夢を叶えてもらいたい。そのためには、人とのつながりがすごく大事で、この学部では人とのつながり方と、それを通して、夢を実現するために欠かせないITを学んでもらい、たくましく生き残る人間を育てていきたいと思っています。

鷲尾 今はいろいろなバックグラウンドを持った人が協働しないと、社会を良くしていけない時代です。一人ひとりに個性があるということがとても重要で、だからこそ、他の人にはできない見方で社会に対するとらえ方ができる。いろいろな課題を見つけることも、人それぞれが違うからこそできるものです。そのように自分の持つ個性を生かして、社会をより良くしていきたいという思いを持つ方であれば、ぜひこのビジネスデータサイエンス学部の受験を考えていただきたい。多様な学生が入学し、社会に出て活躍していただきたいと願っています。

2025年4月誕生 **ビジネスデータサイエンス学部**

学んだ理論やスキルを実践で確かめ、
即戦力のビジネスデータサイエンティストに。

FEATURE (学びの特徴)

- 1 文理の枠にとらわれないきめ細やかな教育
少人数の手厚い初年次(ゼミ等)でビジネスとデータサイエンス双方の基礎知識を習得
- 2 専門性を深める高度な教育環境
実務家を含めた国内外屈指の経験豊かな教授陣による実践志向の専門教育
- 3 実社会とつながったリアルな学び
企業との連携による実データを活用した実践的な学修や産学連携プログラムへの参画
- 4 主体的な学びを促すアクティブラーニング科目
ビジネスとデータサイエンスの融合による課題発見・解決能力を身につける実践的学修

CAREER (卒業後の進路イメージ)

IT産業やメディア、製造業などあらゆる分野でデータサイエンティスト、マーケティングアナリスト、政策・戦略立案者として活躍することが期待されています。経済産業省の発表では、2030年の日本ではIT人材が約79万人不足するとされており、人材ニーズが非常に多い分野です。

▼情報技術を活用するすべての組織



• ビジネスとデータサイエンス両方の視点から高度な技術を実課題に適用する
ビジネスデータサイエンティスト



• 高度な情報処理技術を身に付け、複雑な実問題の解決を行う
技術志向人材

▼ベンチャー企業



• ビジネスデータサイエンティストとして新たな価値を生み出す
起業家

▼教育・研究機関



• ビジネスと人工知能、計算機科学、統計学などの学際分野における
教育・研究者



学びの拠点は「吹田みらいキャンパス」

2023年10月に開設された吹田みらいキャンパスは千里山キャンパスの北東2.2kmに位置し、新学部の他にも国際学生寮やグラウンドなどが揃います。企業・自治体との連携だけでなく、留学生との交流、体育会クラブの活動など、多様な人が集い活気に溢れる環境で学びます。

ACCESS (学部へのアクセス)

- JR京都線「岸辺」駅で下車、徒歩約18分または阪急バスに乗り換え。
- 阪急電鉄千里線「南千里」駅で下車、阪急バスに乗り換え。
- 北大阪急行電鉄「桃山台」駅で下車、阪急バスに乗り換え。(阪急バス利用の場合は「七尾西」下車、徒歩約3分)

学部サイトはこちら▶



■研究最前線

運動パフォーマンスと認知機能の向上を研究 • Research on the improvement of exercise performance and cognitive function

健康の維持・増進、 「体操×マウスリンス」という最適解

国際的課題の「運動不足」に運動生理学で挑む

Maintaining and improving health - “Exercise x Carbohydrate Mouth Rinse” as the optimal solution

Using exercise physiology to take on the international issue of “a lack of exercise”



●人間健康学部 弘原海剛 教授
● Faculty of Health and Well-being
— Professor *Tsuyoshi Wadazumi*

「堺コッカラ体操」をご存じだろうか。親しみやすいネーミングの通り、誰もが楽しく参加できるもので、開発したのは、人間健康学部の弘原海剛教授。堺市からの依頼で2014年に作られ、動画配信などで人気を得たオリジナル体操だ。ホールで行われるイベントも定着している。さらには弘原海剛教授の専門分野との相乗効果によって、前代未聞の領域へと進化を遂げ、海外への波及を目指す。

Have you heard of the “Sakai Co-kara Exercises”? As the friendly naming indicates, these are exercises that anybody can take part in and enjoy. They were developed by Professor Tsuyoshi Wadazumi of the Faculty of Health and Well-being. They are original exercises that were created in 2014 at the request of the city of Sakai and became popular through video streaming and other channels. Events held in halls are also becoming established. Furthermore, by using the synergy with Professor Wadazumi’s area of expertise, the research has advanced into an unprecedented field and there are aims to spread it overseas.



●堺コッカラ体操

Sakai Co-kara Exercises



■座った状態でもできる楽しい体操

—先生が開発した「堺コッカラ体操」について教えてください。
この体操は、関西大学と堺市の地域連携事業から生まれました。「高齢者向けの介護予防、認知症予防にもつながるオリジナル体操を作ってほしい」というオーダーでしたが、専門が運動生理学であり、当時体操実技についての見識はそこまでありませんでした(苦笑)。ただ義務感に駆られ、データや文献を集めるところから始めました。

体操のベースは、ブロックエクササイズ。手拍子、手で膝を叩く、手で机を叩くなどといった一つひとつの動き=ブロックを組み合わせていく体操の形式です。音楽に合わせて座った状態でも行えるため高齢者にでもできて、何より楽しいのでびったりだと考えました。

—体操の効果は、どのように実証していったのですか。

まず、体操がもたらす運動の強度と脳血流量を測定しました。すると、この体操の運動強度は2~3METs(メッツ)で、ゆっくりした歩行に相当。無理なく行えます。でも脳の活性化はジョギング運動時と同程度だと分かりました。

認知機能向上の検証には、TMT(トレイル・メイキング・テスト:数字や文字を、いかに指示通りに素早く選択できるか)やST(ストロープテスト:色名読み取り課題と、色名と色の不一致課題)という検査方法を用いました。測定してみると、被験者の認知機能が、体操をした後に向上し、脳血流量の増加も顕著だったことから、堺コッカラ体操の効果が明らかになりました。

■エビデンスを増やし、SNSでの海外普及を目指す

—堺コッカラ体操には、さまざまなバリエーションが生まれていますね。

どんな音楽にも合わせられる体操で、見ても作っても楽しいというのが特長。飽きが来ないので続けられるんですね。

「堺コッカラ体操」の普及活動を進めていた頃、全国のご当地体操を調べたことがありました。気付いたことは、筋肉や関節に働き掛ける体操はあっても、認知機能に特化した体操は少ないということ。普及させる価値を感じました。そして現在は、海外にも需要があると考えています。

—海外ニーズですか。

2022年に関西大学の制度を使ってフランスに留学したのですが、現地には、高齢者向けの体操教室やアクティビティが、あまり無いんですね。高齢者コミュニティの方に、ブロックエクササイズを教えると、ぜひ広めたいと言ってくれたんです。最近ではテレワークの普及や子どもたちのゲーム人気もあり、座りっ放しの人の運動不足が世界的な課題になっています。体操の普及がそうした課題解決につながると考えています。

—どのように普及させていく予定ですか。

SNSの活用です。現在、学生と一緒に体操動画を作成してYouTubeにアップしていますが、英語や韓国語バージョンも作ってさまざまなSNS媒体を活用し世界へ向けて配信しようと計画をしています。



▲堺市内の各所で体操教室を実施
Exercise classes are held at various locations in Sakai City

■Fun exercises that can even be done while sitting

— Please tell us about the “Sakai Co-kara Exercises” you developed.

The exercises were born out of a regional collaboration project between Kansai University and Sakai City. My order was to “create original exercises for elderly people that will help prevent the need for care and help prevent dementia.” However, my specialty was exercise physiology and I didn’t have much insight into practical exercises at that time. Nevertheless, I felt a sense of duty to create something and started by collecting data and literature.

The base of the exercises is block exercises. This is a form of exercise which combines a series of movements (= blocks), such as clapping, tapping a knee with a hand, and tapping a desk with a hand. The exercises can be performed to music and while sitting, so they are also possible for elderly people, and above all, they are fun, so I thought they were perfect.

— How did you verify the effect of the exercises?

First, we measured the intensity of the exercise and the cerebral blood flow caused by the exercises. The results showed that the intensity of the exercise was 2 to 3 METs, which is equivalent to walking slowly. They can be performed without excessive effort. However, we found that the activation of the brain was about the same as during jogging.

To verify improvement in cognitive function, we used testing methods called TMT (Trail Making Test: Test to see how quickly the subject can select numbers and letters as instructed) and ST (Stroop Test: Color name reading tasks and tests where the color name and color do not match). When we took measurements, we saw that the cognitive function of the participants improved after the exercises, and also that there was a noticeable increase in cerebral blood flow, so this clarified the effectiveness of the Sakai Co-kara exercises.

■ Increase the amount of evidence and aim to spread the exercises overseas via SNS

— There have been many variations of the Sakai Co-kara exercises created.

These are exercises that can be matched to any music, so one feature is that they are fun to watch and also fun to create. You can continue doing them because you don’t get bored.

When I was working to popularize the Sakai Co-kara exercises, I spent time investigating the local exercise routines around the country. What I noticed is that while there are exercises that work on the muscles and joints, there are few that focus specifically on cognitive function. I felt that there was value in spreading the Co-kara exercises. And now I think that there is also demand for them overseas.

■研究最前線



●炭水化物マウスリンス
carbohydrate mouth rinse



▲「炭水化物マウスリンス」の準備作業
Preparation work for carbohydrate mouth rinse

◀炭水化物を含む液体を口内にスプレーして握力の変化を測定
Spraying a liquid containing carbohydrates into the mouth and measuring changes in grip strength



自転車に負荷運動を行い有酸素性能力を測る装置
A device that measures aerobic capacity by performing load exercise on a bicycle



◀マウスリンスの実効性を検証するために大阪マラソンに出場した弘原海教授
Professor Wadazumi participated in the Osaka Marathon to test the effectiveness of the mouth rinse.

■大阪マラソンでスプレーの実効性を測定

—— 一方で先生は、「炭水化物マウスリンス」研究の第一人者でもありますね。

体操よりも、こちらが専門です。炭水化物マウスリンスとは、炭水化物を含んだ液体を口に含んで吐き出し、体内にエネルギー源を入れなくとも運動パフォーマンスの向上を図ろうとするものです。マラソンなど長時間に及ぶ競技では、どうしてもエネルギーが減少し、パフォーマンスが低下します。そのためレース前やレース中の炭水化物補給は不可欠なのですが、物を胃や腸に入れてしまうと、身体に負担がかかります。そこで、飲み込まずに吐き出すマウスリンスという方式が考案されました。

そもそも私は、効果的なスポーツドリンクの開発を目指していたのですが、その過程でマウスリンスに出会い、本格的に研究を始めました。

—— どのように研究を進めてきたのでしょうか。

着目したのはマウスリンスの方法です。従来の「吐き出す」方法は衛生上の問題があります。しかし、スプレーを用いて噴霧すれば、それらを解決できると考えました。

共同研究者や学生と協力して、従来からの液体を口に含む方法とスプレー方式との効果に関する比較実験を繰り返し行い、実効性を検証。実験室では被験者に自転車で負荷運動を行ってもらいフルマラソンの35Kmの壁と呼ばれる身体のエネルギー枯渇状態を再現し、スプレー前後での血糖値等の変化及び運動パフォーマンスの結果を見極めました。また、私自身、大阪マラソンにも出場し、要所で採血をして血糖値を計り、35Kmの時点でスプレーを実施しました。実際に走ってみて、マラソンの過酷さとスプレーの効果を体感しました(笑)。いずれの実験でも、液体を口に

含む方法とスプレー方式の効果に差がないことが立証でき、2022年に博士課程の学生が発表した成果論文は、研究者から驚きをもって迎えられました。

ちなみに現在は大手食品会社と協同でタブレットタイプを開発研究中。小さな固形にすることで、時間的にも物理的にもスムーズに摂取できると考えています。

■手が震えるほどの感動を覚えた相乗効果への期待

—— 今後、体操とマウスリンスの研究はどのように進んでいくのでしょうか。

この2つはある事象において相乗効果があると考え、研究を進めています。それは、認知機能への影響です。体操だけでなく、炭水化物もまた口に含むことで、脳に刺激を与えるということが分かっています。体操同様に、DLPFC(背外側前頭前野)という認知機能をつかさどる脳の部位を活性化させるんですね。この事実を、堺コッカラ体操を作り始めた頃に読んだ文献で見つけた時は「マウスリンスと同じじゃないか」と、感動で手が震えました。これまでに行った実験でも、エクササイズだけを行うよりも、合間にスプレーでマウスリンスを行う方が認知機能にプラスの影響がみられています。

—— 認知症予防に新たな光明が見えているわけですね。

慢性疾患や障がいを持つ方や高齢者にも最適な運動方法を模索し、一人でも多くの人に楽しんでもらえるエクササイズを作りたいと、十数年前から取り組んできましたが、実はWHOが2020年に同様のことを推奨し始めました。ようやく時代が私たちに追いついてきたなと思っています。ここに栄養素の持つ機能性(認知機能への影響)をプラスして、より一層健康の維持・増進につながるモノとコトを開発していきたいと思っています。



コースの要所で採血し血糖値の変化を計測
Blood was drawn at key points along the course to measure changes in blood sugar levels.

■ Requirements for them overseas?

In 2022, I used a Kansai University system to go and study in France. When I was there, there weren't many exercise classes or activities for the elderly. When I taught the block exercises to people in an elderly community, they said they definitely wanted to spread the word. Recently, a lack of exercise among people who are constantly sitting down has become a global issue, in part due to the spread of working from home and the popularity of gaming among children. I believe that spreading the exercises will lead to the solution of such problems.

■ How do you plan to spread them?

By utilizing SNS. I am currently making exercise videos with students and uploading them to YouTube, but we are also planning to make English and Korean language versions and to distribute them to the world through various SNS media.

■ Measuring the effectiveness of spray during the Osaka Marathon

—— In another area, you are also a leading researcher on “carbohydrate mouth rinse.”

That is really my specialty, more than exercises. A carbohydrate mouth rinse is a liquid containing carbohydrates that is taken into the

mouth and then spat out in order to improve exercise performance without taking an energy source into the body. In marathons and other competitive events that last for a long time, it is inevitable that energy will decrease and performance will decline. That is why carbohydrate supplementation before and during a race is essential. However, if you put things into your stomach or intestines, this places a strain on your body. This was why the mouth rinse method was devised, where the liquid is spat out without swallowing it.

In the beginning, my goal was to develop an effective sports drink. However, I came across the mouth rinse along the way and began to research it in earnest.

■ How have you conducted your research?

What I focused on was the method of the mouth rinse. The traditional method of spitting it out is a problem in terms of hygiene. However, I thought that we could solve that problem if we used spraying with a spray.

In cooperation with joint researchers and students, we repeatedly conducted experiments to compare the spray method with the conventional method of putting a liquid into the mouth and we verified the effectiveness. In the laboratory, we had subjects perform loaded exercise on a bicycle to reproduce the state known as the 35 km wall in a full marathon, which is where the energy in the body is depleted. We then investigated changes before and after spraying in aspects such as the blood glucose level and the exercise performance results. I also participated in the Osaka Marathon myself, took blood samples for blood sugar level measurement at key points, and performed spraying at the 35 km mark. By actually running myself, I experienced the harshness of a marathon and the effectiveness of the spray. Both of these experiments proved that there is no difference in effect between the method of putting liquid in the mouth and the spray method. When a doctoral student presented this in a paper in 2022, it was met with surprise from other researchers.

Incidentally, we are currently working with a major food company to develop a tablet type. We believe that using a small solid will make it possible to take it in smoothly, both physically and in terms of the time required.

■ Expectations for a synergy that was so exciting it made my hands tremble

—— How will the research on the exercises and the mouth rinse progress in the future?

I believe that these two areas will have a synergistic effect on a particular matter, and I am conducting research on this. Namely, this is the impact on cognitive function. It is known that in addition to exercise, putting carbohydrates in the mouth also stimulates the brain. As with exercise, it activates the DLPFC (dorsolateral prefrontal cortex), which is a part of the brain that controls cognitive functions. When I discovered this fact in the literature I was reading when I first started creating the Sakai Co-kara exercises, my hands trembled with excitement when I realized that this was the same as for mouth rinse. In the experiments we have conducted so far, we have seen that performing a mouth rinse using spray during breaks creates a greater positive effect on cognitive function than just exercising alone.

■ So, you have cast new light on the prevention of dementia.

For more than a decade now, we have been working to find the best exercise methods for people with chronic diseases or disabilities, and for the elderly, and we have wanted to create exercises that can be enjoyed by as many people as possible. In fact, the WHO started recommending similar activities in 2020. I think the times are finally catching up with us. We would like to add the functionality (Effects on cognitive function) of nutrients to this, and to develop items and actions that will further contribute to the maintenance and improvement of health.

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [卒業生インタビュー]

失敗しない人生こそが最大の失敗

思い描く未来すべてに迷わず挑んでいく

●フラワークリエイター
森 俊弥 さん —経済学部 2008年卒業—

駐車場の一角に張ったテントショップで花を売り始めたのは大学3年次生の時。現在は地元・江坂に店舗を構え、今やその店名を冠したSNSの総フォロワー数は100万人を超える。自身と同じクリエイターたちをサポートしていく会社も立ち上げ、さまざまな業界に新しい風を巻き起こしている森さん。フラワークリエイターでありインフルエンサーでもある多忙な毎日の合間を縫ってお話を伺いました。



●大学在学中に駐車場の一角で起業

もともと日常的に花が周りにあったわけではない。「花が好きだから花を扱う仕事がしたい」と花屋を開業される人が多いのですが、僕はもともと興味のあったおもてなしの仕事につながる商材を探していて、この道に出会いました。

就職前に社会の仕組みを体験したいと大学在学中に起業した。初めはスーパーマーケットの提携駐車場にテントを広げた簡易店舗だったが、5,000枚のチラシを配布したかきもありオープン時



注文を受けたプロポーズ用の花束。33本の赤いバラの花束には「3回生まれ変わっても3回愛する」という意味が込められている

森 俊弥—もりとしや
■1985年、鳥取県生まれで、2歳から吹田市江坂で育つ。関西大学経済学部卒業。大学3年次生の2006年9月に起業し、フラワーショップ「bow」をオープンさせる。その後、業態形態を変更しながら、現在は江坂にある「MORIYA」の代表を務めるほか、「社団法人Creator Agency」代表理事、「吹田市シティプロモーションアドバイザー会議」委員なども兼任している。

の特売セールには買物客の大行列。その後も客足が途切れることはなく、連日花鉢や花苗まで売り切れるほどの人気店になった。

当初は就職までの仕事のつもりでいたが、オープン翌年に森さんの意識を変える出来事があった。「母の日に花束を購入いただいた大学生が、普段あまり会話もなかった母親にプレゼントしたら、互いに思いが溢れて2人で号泣したと後日教えてくれた。僕には何気なく作った一つのアレンジメント、そこに人の人生を揺さぶる価値があると気付かされました」。

この仕事にやりがいを見いだした森さんだったが、それまで順調だったビジネスの雲行きが怪しくなる。出店していた駐車場の管理会社が変わり、撤退を余儀なくされる事態に。閉店の道もあったが、顧客を十分に獲得していると自負していたため、隣接エリアの東三国に店舗をオープン。今後の事業も見据えて店名を「MORIYA」に変え、再スタートを切ったのだ。

ところが予想に反し、客足は一気に遠のき大赤字に。今まで足を運んでくれていた顧客には生活圏内の店だから選ばれていたと分析ができていなかった自分の甘さゆえの失敗だった。

●SNSを活用し店のブランディングに成功

東三国の「MORIYA」はわずか10カ月で閉店。しかし、すべてがダメになったわけではなかった。当時フラワー業界ではまだ珍しかったオンラインショップでの販売が好評を博し、軌道に乗り始めたのだ。アレンジメントや花束、心に響くギフトを届けられれば全国に顧客ができると実感。思い切って店舗販売をやめ、フ



▲「MORIYA」創業のころ



▲インフルエンサー100人以上が集まったイベント「SNS EXPO 2023」



企業向けSNS講座

ラワーギフト専門のオンラインショップに舵を切ることにした。

心機一転、地元の江坂で店舗販売をせず、ギフトを全国へ届けるベアスキャンプを構えた「MORIYA」のオンラインショップは好調なものだったが、攻めの姿勢を崩さず新たな展開に出た。

「『MORIYA』の花がいい、『MORIYA』で買いたいと選んでもらえるようにするため、ブランディングすることにしました」。まずは他店との差別化を図るため、完成したギフトの画像ではなく、制作過程のショートムービーをソーシャルメディアにアップ。さらにSNSに限ってはプロポーズ用ギフトに特化した投稿を重ね、「プロポーズ=MORIYA」を印象付けることにした。

このアイデアが大ヒット。初投稿から注目を集め、いわゆる「バズった」状況に。半年でフォロワーは5万人超え、フォロワーが増えれば必然的に注文も増えた。現在もプロポーズ用ギフトの注文が圧倒的に多く、思い描いた「プロポーズ=MORIYA」の定着化に成功した。

●もっとクリエイティブに働ける世界を

TikTokやInstagramなど数々のSNSを巧みに活用し、アカウント開設から4年経った今では総フォロワー数100万人を超える人気ぶり。やがて同様にインフルエンサーとして活動するクリエイターの仲間も多くなってきた。

「僕は販売する商材が手元にあるため“バズる”ことが自分のビジネスに直結します。けれど若いクリエイターたちに話を聞くと、拡散を依頼してくる発注企業とクリエイターをつなぐ仲介業者も



黄樂宗大本山「萬福寺」での献花▶

存在するのでおのずと利益は減り、個々の発信力も消費されている状況。危機感を感じましたね」。

クリエイターが集まれば企業と団体交渉もしやすく、個々で動くよりコストも削減可能。大勢でイベントを開催すれば各々のファンを多数呼ぶことができ、社会的にもっと活躍できる場を増やせると、2022年に「一般社団法人Creator Agency」を立ち上げた。

最初に取り組んだのは万博記念公園で開催した『SNS EXPO 2023』。インフルエンサー100人が集結し、各ブースで物販やワークショップを行い、インフルエンサーたちのステージも披露した。入場者は2万人を超え大盛況。このイベントが新しい仕事につながったというクリエイターの声も多く、効果は十分だった。

2024年8月には第二弾イベントとして『Creator Festa』を東京で開催。ファンが集まるイベントではチケットの売れ行きは好調で、企業とクリエイターをマッチングするイベント『CREATORS CONNECT』も行った。

●誰かにとって必要不可欠なサービスであるために

起業した大学時代の話伺うと、仕事が多忙を極めた時期も友人に店を任せて熱心にゼミへ通っていたそう。その中で教育や哲学、経営など多様な本を読み、その時得た知識が今でも仕事に役立っているという。

「ゼミの方針は“当たり前を問い直す”。中澤信彦教授はよく『常識を疑え』とおっしゃっていました。一般的な花屋でなく自分らしくやりたい花屋でいいと思えたのも、この言葉があったから」。

自分の好きなものを売る、利益を上げることよりも、「誰かにとってなくてはならないサービスでありたい」。ギフトに注力する森さんが思い描いたビジネスのベースにはこの思いが今も力強くある。

「MORIYA」「Creator Agency」と二足のわらじだけでも多忙に思えるが、アグレッシブな森さんの活動は実はこれだけにとどまらない。商工会議所や大学でのセミナー、フラワーパフォーマンスイベント、寺院での献花、加えて青年会議所での活動(2023年度理事長)、評議委員や地元イベント実行委員などにも精力的で活動は挙げればきりが無い。

「やりたいことにはどんどん挑戦したい。やらない理由ばかり挙げて二の足を踏む人も多いけれど、思ったことを実行に移すのはそんなに難しいことじゃないですよ」。

今後は「花を用いた新事業」を考案し、将来的には飲食店や宿泊施設なども備えた複合「MORIYA」ビルを建てたい。そしてみんながもっとクリエイティブに働ける社会を作りたい、とさまざまな展望を生き生きと語ってくれた。

「挑戦してダメだったら、違うことをすればいいだけ。僕もたくさん失敗してきたけれど、失敗すれば心置きなく次のステップへ進めます。失敗しない人生の方が失敗ですよ」。

真のサステイナブルをつくる!

主体的な学びで実を結んだ新ビジネス

●法学部 3年次生
鳥井田 稔仁 さん



鳥井田稔仁さんが、自身のビジネスを始動させたのは2024年3月15日のこと。仲間2人との船出は、中学生の頃から磨き上げてきた初志が形になった瞬間だった。志の背景にあったのは、環境に対する危機感だ。世界中で大量に廃棄される衣服、変わりゆく地球環境。「なんとかしたい」、「自分ができることは何か」、そんな自問の答えに迫る。

LEADERS NOW!



▲衣服からアップサイクルされたバッグ

●マスメディアも注目した新事業

本誌の取材冒頭に手渡された資料は極めて明瞭だった。「2024年6月に行われた大学主催のメディア懇談会で私たちの事業についてお話しした時の資料です」。鳥井田さんは、メディアの前で堂々と自分たちの考えと実績を語り、新聞記者はその活動を紙面で取り上げた。鳥井田さんが立ち上げた事業「ETHOS」は、古くなった衣服を縫製して、バッグなどに再生するというもの。「ブランド名は「3150築(さいこうちく)」」。廃棄されるものに、デザイン性や機能性を加えることで、商品価値を高めて再利用するアップサイクル事業です。顧客は自身の古着を3150築に送り、ECサイト上で選んだトートバッグやサコッシュに縫製してもらい対価を支払うという、受注生産販売の形態を取っている。



●「もったいない」と環境への危機感

事業の原点は「お気に入りのジーンズが小さくなって履けなくなった」中学生時代にある。「思い出が詰まっていて、捨てるのはなかった。そこで思いついたのが、トートバッグへの再構築でした」。ミシンで縫って作り上げた元ジーンズのバッグは、今も愛用している。(◀写真) また、大学生になって感じた変化も後押しした。「幼い頃からアウトドアスポーツを楽しんできたのですが、最近の海はサンゴ礁が減り、ゴミが増えている。スキー場には雪が降らないし、雪質も落ちている」。鳥井田さんを突き動かしたのは、「もったいない」という意識と悪化する地球環境への危機感だった。



幼少期からアウトドアスポーツに親しんできた鳥井田さん (写真上: スキー場にて / 写真下: ダイビング) ▶

●構想をバックアップしてくれた「関西大学山岡塾」

危機感を感じながらも、自分に何ができるのかは分からなかった。転機は大学2年次生の時に、関西大学の「山岡塾」という正課外プログラムに出合ったことだ。山岡塾は、2022年に大学昇格100周年を記念して創設された。選抜された学生が、専門家・経営者からの助言や資金援助を受けながら、社会的課題の解決を図ることを目的としている。鳥井田さんは「主体的な学び」を重視していたため、迷わず応募して、入塾を果たした。

塾生は、「教育」「健康」「環境」の3つのテーマから一つを選び、チームで具体的な課題を設定した上で、仮説設定と検証を繰り返して解決策の提示を目指す。鳥井田さんは「環境」を選択し、心の中で温めてきた古着の再構築をテーマに掲げると、2人の塾生が賛同し、チャレンジが始まった。



▲関西大学経済人クラブ主催「山岡塾 太郎を訪ねて視察・講演ツアー」に参加

山岡塾・報告会の様子

▲(写真左から)「ETHOS」メンバーの今井洸太さん、鳥井田さん、中島里佳子さん

■関西大学山岡塾とは

関西大学は2022年に大学昇格100周年を迎えたことを契機に、学園の理念(学是)である「学の実化」^(※1)を具現化する新たな試みとして、関西大学山岡塾を創設。「今日より良い明日を創ろう」のビジョンのもと、「学の実化を体現するフロントランナー」^(※2)の育成を目指し、社会的課題の解決に向けてチームで協働して取り組む正課外プログラムとなっている。

塾の活動は、個人ではなく「チーム」で協働しながら取り組むため、学部、研究科、学年の垣根を超え、互いに刺激し合いながら活動することができる。また、校友(経営者や起業家、専門家等)による専門的な助言や活動資金の支援を得ながら実践形式で取り組むことができる。

2024年度で3期目を迎えた塾では、本学の学部生・大学院生や本学併設校の高校生(原則2年生)等を対象に、吹田みらいキャンパス周辺の地域課題を解決する持続可能な仕組みの提案に向け、4チームに分かれて活動を進めている。

●関西大学山岡塾 <https://www.kansai-u.ac.jp/yamaoka/>



※1「学の実化」……大学は教育研究に実社会の知識や経験を取り入れ、社会は大学の学術研究の成果を取り入れることによって「学理と実態との調和」を求める考え方のこと。
※2「フロントランナー」……課題を自ら設定し、解決に向けて、自己の役割を正しく認識しながら「主体的」に考案できる人材を指す。

●調査から見えた問題点と絶妙な転換

進めたのは自身の構想の是非・正否を問うアンケート・インタビュー調査だ。すると、次々と想定外と新発見に出会う。最初にぶち当たった壁は商標権だった。「当初は回収ボックスで集めた古着をバッグにして、不特定多数に売るというスキームを考えていました」。しかし、衣服の多くはブランドやメーカーロゴが付いているため、誰かれ構わず販売すれば、消費者はそのブランドの商品だと勘違いする恐れがあり、法にも触れる。「とはいえ、ロゴを外す作業は大変ですし、外せば価値も下がる」。再考し、たどり着いたのが前述の受注生産販売だった。「お客様の古着をそのままバッグにして返すので、たとえロゴが付いていても誤認はない。同時に在庫を抱える心配もなくなりました」。在庫が多くなれば、廃棄という本末転倒の可能性もあった中で、絶妙な転換といえた。

●やって良かったと感じた一通のメール

その他、服飾の専門学校に取材をしたり、山岡塾の講師主催のブランディング勉強会に参加したり、運営委員を務めた文化祭でアンケートを実施したりと、できる限りの調査と検証を行い、ビジネスモデルを固めていった。「ファッション好きの私は、個人的でオンリーワンのバッグの販売を考えていたのですが、取材やアンケートをする過程で、『デザインはシンプルな方がいるんなら服に合わせやすい』『一点物へのカスタマイズはコストが掛かり過ぎる』といった意見も参考にしました」。ECサイトや事業ロゴの作成依頼、縫製業者探しなどにも奔走。学業との両立で多忙を極めながらも、メンバーと協力して事業化にこぎつけた。心から良かったと感じられたのは、一通のメールが届いた時だ。「私たちを紹介する新聞記事を読んだ方からのメッセージで、理念を理解してくださって、注文と共に「応援しています」と添えてあった。うれしくてスクショを残しています(笑)」。



ロゴ作成の打ち合わせ

大阪文化服装学院へ訪問取材

●理想は「たまたま環境に良い商品」

「注文数を増やし、事業を拡大していく」。今の目標をそう語る鳥井田さんには、信念がある。一つは「『アパレル産業の未来を照らす、始まりの灯になること』。衣服は人間にとって不可欠なもの。だからこそ環境に負荷を掛けずに楽しめるものを提供したい」。そして、最終的には「環境に良い」という看板を外したいという。「サステイナブルファッションやエシカルファッションというのは、一過性のトレンドだと感じており、流行が去っても、求められ続けるものにしていきたい」。商品のデザイン性を高めるのに余念がないのは、そこに理由がある。「『良いなと思った服やバッグが、たまたま環境に良いものだった』が理想です」。真に持続可能な事業とブランド、そして社会をつくるべく、鳥井田さんの挑戦は続く。



■リーダーズ・ナウ [在学生インタビュー]

「KAISERS PRIDE」を胸に20年、より信頼厚きチームに成長する未来へ



2004年、体育会を総称するチームネームとして誕生した「KAISERS」は2024年に20周年を迎えた。所属するのは44部、総勢およそ2,500人。この「KAISERS」というチームネームは、誇りと責任感を浸透させることを目的に名付けられ、各部のつながりをより強固にし、切磋琢磨する良き仲間の絆を育み続けている。今回は、体育会本部副本部長、バレーボール部女子主将、ATルーム学生トレーナー部主将に、「KAISERS」の魅力を感じる分語ってもらった。



KAISERSの歴史



▲昭和6年(1931)、日本コロムビア株式会社製作の「学歌(A面)」と「学生歌(B面)」を収録したSPレコード(関西大学合唱団) (関西大学 年史編集室所蔵・中嶋英文氏寄贈)

関西大学体育会全体のチームネームとして「KAISERS(カイザーズ)」が誕生したのは2004年。かぶとをつけて戦いに赴く皇帝の横顔をデザインしたシンボルマークも2024年で20周年を迎えた。「カイザー」はドイツやロシアの皇帝・王者の称号。古代ローマの軍人、政務官のカエサル(ジュリアス・シーザー)を語源とする言葉で、あらゆるスポーツで頂点を目指して突き進む姿勢を表している。その姿をなぞらえて、関西大学応援歌(カイザー関大)の歌詞に「カイザー」が使われ、これがチームネームとして採用された。「カイザー」が歌詞に登場する応援歌の歴史は古く、もともとは学生歌「桃源千里」などのタイトルで昭和初期(1930年頃)には歌われていた。日本コロムビア株式会社が製作したレコードの歌詞カードには「阿賀杜里作詞、阪東政一作曲」とある。この頃から「応援歌式に歌う」ことが推奨されており、これが応援歌になっていったとみられ、今も応援団によって勇壮に歌われるのを聞くことができる。作者の阪東政一さんは関西大学卒業生だが、作詞者についてはよく分かっていない。100年にわたって母校の勝利を願って歌われてきた「カイザー関大光あり」の歌詞は、チームネームとして定着している。

● KAISERSの仲間は刺激を与え合う存在



バレーボール部女子主将 人間健康学部4年次生 根来 あかねさん(大阪国際滝井高等学校卒業)

2024年の第47回総合関関戦では、「KAISERS」の代表として団結式での決意表明や開会式での選手宣誓を任せられました。その様子を見てくれた他団体の仲間から声を掛けてもらい、試合の応援に来てもらえることも。部の垣根を越えた「KAISERS」というつながりが、バレーボール部単独で活動するだけでは得られない、お互いを尊重し高め合う関係性を構築しています。現在、バレーボール部女子では練習メニュー



▲関関戦団結式での選手代表挨拶 (写真提供:関大スポーツ編集局)

や試合予定など、ほとんどのことを学生、特に4年次生がメインで決定しています。高校までは先生が決めていたことを、大学では“学生主体”で取り組むようになり、これは大学スポーツの魅力の一つだと感じています。今はその役割を担い、毎日とても忙しいけれど、充実しています。もちろんその中で主将として悩んだり迷ったりすることも多々あるのですが、そんな時には他団体の試合の応援に参加し、主将の動きや役割などを参考にすることもありますね。

「KAISERS」みんなが体育会の仲間として交流することで良い刺激を受けながら切磋琢磨していけるのは恵まれているし、ありがたいと日々感じています。今後は「KAISERS」の中で、バレーボール部女子がより良い影響を与えられる存在になっていきたいです。



▲試合中の様子 (写真提供:関大スポーツ編集局)

Player

● KAISERSを支える“縁の下の力持ち”



ATルーム 学生トレーナー部 商学部4年次生 鈴木 群史さん(清風高等学校卒業)

私たちは「KAISERS」の選手たちのコンディショニングを高めたり、負傷で競技離脱した際のリコンディショニングのサポートなどを行ったりしています。学生トレーナーとして活動できる部活というのは珍しいのではないのでしょうか。資格を有するアスレティックトレーナーの下で活動し、部内テストに合格することでサポートできる内容が高度になるという仕組みになっています。主な活動は、「ストレッチやエクササイズに



▲ATルームでの活動。可動域測定の様子



▲試合前、選手にテーピングをする様子

よる選手のサポート」、「各部のマネージャーにテーピングの正しい巻き方などを指導する育成活動」、「練習や試合に付き添い、応急処置などを行う帯同活動」の3つです。帯同した時に自分が巻いたテーピングで「これで痛みなくプレーすることができた」「おかげで勝てた」と声を掛けられた時は、本当にやりがいを感じました。

実は僕も高校時代にけがをしてテニスの道をあきらめた経験があり、負傷で競技離脱した選手たちの悔しい気持ちも分かります。だから自分たちの活動で復帰できた選手が、フィールドで活躍している姿を見ると力になれた喜びを感じますね。現在は部員が9人のみなので、もっと部員を増やして「KAISERS」全体をさらに手厚くサポートできる団体していきたいです。

Trainer

● 20周年を機により愛されるKAISERSへ



体育会本部 副本部長 文学部4年次生 井上 裕貴さん(明星高等学校卒業)

私たち体育会本部は、体育会各部の競技力向上や一体感の醸成に貢献できるように、年間行事の企画・運営や日常的な体育会活動のサポートをしています。

体育会で統一のチームネームがある大学は全国でも珍しく、この「KAISERS」という名称があることによって、団体同士のつながりや一体感が他大学よりも強いものになっていると自負しています。例えば毎月末に行う主将主務会後に「KAISERS DISCUSSION」というものがあり、活動に関する悩みや運営のアドバイスを話し合える機会があるのは「KAISERS」の一体感の表れではないでしょうか。

また大学近隣のお店・地域の方々にもこのチームネームの知名度は高く、ありがたいことに熱心に応援していただいています。今まで以上に多くの方々に「KAISERSの試合を応援しに行きたい」、「KAISERSなら試合を見に行こう」と言ってもらえるような土壌を、学校や地域と一緒に作り上げていくのが理想であり今後の目標ですね。

僕たちは、体育会に誇りを持つという時に「KAISERS PRIDE」と表現します。今年、「KAISERS」は20周年を迎えますが、この名前の重みは20年間という長い時間をかけて、先輩方の惜しみない努力で積み上げられてきたもの。これからも、この「KAISERS」という名前により大きな信頼を積み上げていけるようにしたいですね。



▲行事にて総評を行う様子 (写真提供:関大スポーツ編集局)



▲完成した関関戦パンフレットを片手に

Sports Club Headquarters

◎UHA味覚糖の人気グミ「コロロ」とのコラボ商品

関大生がパッケージを手掛けた「関大コロロ」を限定販売



▲関西大学×UHA味覚糖「関大コロロ」

関西大学はUHA味覚糖株式会社と連携し、関大生がデザインした「関大コロロ」を発売した。7月25日より各キャンパス内の売店で限定販売が開始され、今後はイベント等での配布も予定されている。

「関大コロロ」は、丸く可愛い形と果実のような食感で多くのファンを持つUHA味覚糖の人気商品「コロロ」とのコラボ商品。近年、グミは若者を中心に人気があり、「グミコミュニケーション」という言葉も生まれるほど、大学生の間ではコミュニケーションツールの一つになっている。この状況を踏まえ、今回のコラボでは「さらに活発な学生間のコミュニケーションを」と、本学のスクールカラーである「紫紺」と同系色の「コロロ(巨峰味)」をマッチングさせ、マス・コミュニケーション学研究部の2人がパッケージをデザインした。

その一人、多田菜乃さん(文学部3年次生)は、今年20周年を迎える体育会「カイザーズ(KAISERS)」のロゴマークとともに、体育会の各競技中の選手を描いたイラストを「輪になるイメージ」で円形に配置したデザインを考案。「20周年を祝福する明るい和やかな雰囲気にしました。コロロはよく食べるので、自分のデザインしたコロロが登場するのはうれしい」と喜びを語った。



●多田菜乃さん



●向山温登さん

もう一人の向山温登さん(経済学部3年次生)は、幾何学模様をベースに2025年4月開設予定のビジネスデータサイエンス学部と吹田みらいキャンパスをイメージしたデザインを考案。「近未来的なイメージを取り入れ、パステルカラーの明るい印象とスクールカラーを基調にデザインしました。デザインが採用されたのは初めてでとてもうれしい」と語った。

◎名投手ゆかりの品約25点をご遺族より関西大学博物館へ寄贈

阪神タイガース村山実氏のユニホームやキャップ等を収蔵



▲1973年に行われた引退試合の写真パネル

関西大学体育会野球部OBで、阪神タイガースの投手・監督として活躍した村山実氏(1936～1998年)のゆかりの品約25点が、遺族から関西大学に寄贈された。

村山氏は1959年商学部卒。2年次生の時に全日本大学野球選手権大会で優勝し、関西六大学リーグの最優秀選手に2回選ばれるなど、大学野球部で活躍した後、大阪タイガース(現・阪神タイガース)に入団。「ザトベック投法」と称される全力投球で人気を得るとともに、エースとして1962年にタイガースをリーグ優勝に導き、最高殊勲選手に選ばれた。後に監督も務めている。巨人・長嶋茂雄選手とのライバル対決は全国の野球ファンの注目を集めた。

この度寄贈されたのは、タイガース時代のユニホームやキャップ、沢村賞受賞記念の盾、防御率セ・リーグ新記録賞の記念盾、



▲全日本大学野球選手権大会優勝記念のパネル

村山実氏のご遺族から寄贈されたユニホーム、盾、写真パネルなど



ベストナインの表彰状など約25点。その中には、関西大学時代の1956年に全日本大学選手権で優勝した際の記念写真パネルも含まれている。

7月25日の贈呈時には村山氏のご遺族と芝井敬司理事長が会談し、ご遺族は「故人の野球界活躍の原点となり、縁の深い母校にゆかりの品を収蔵してもらえれば」と、本学に思い出の品を寄贈するに至った経緯と思いを語られた。

寄贈品は関西大学博物館で保管し、将来的には関西大学とプロ野球をテーマにした企画展示なども検討している。

JOINT PROGRAM ■社会貢献・連携事業/地域連携

◎宮内庁宮内公文書館・堺市博物館・関西大学共催

企画展「仁徳天皇陵と近代の堺」を開催



大阪府堺市にある仁徳天皇陵(写真提供:堺市)

関西大学は、宮内庁宮内公文書館、堺市博物館と企画展「仁徳天皇陵と近代の堺」を9月14日(土)から堺市博物館で共催している。10月13日(日)には堺キャンパスで仁徳天皇陵の保全などをテーマにシンポジウムが開かれるほか、9月22日(日)と10月6日(日)には講演会も開催。

本企画展は、近代における陵墓と堺の人々とのつながりを、宮内公文書館が所蔵する公文書や地域に残されてきた資料、関西大学博物館が所蔵する資料からたどるもの。関西での開催及び宮内公文書館が地方自治体と開いている展示会に大学が共催の形で加わるのは初めてとなる。

関西大学が堺市との地域連携協定事業として進めてきた、宮内公文書館所蔵の特定歴史公文書等の調査研究や、三次元レーザーを使用して実施した仁徳天皇陵における壕調査の成果も合わせて広く伝える。こうした調査研究の結果がまとめられ、三者共催による企画展が実現した。



明治30年代から大正時代の始めにかけて、仁徳天皇陵等に掲示されていた「英文制札」。陵墓への立ち入りや魚や鳥の捕獲の禁止について記している(関西大学博物館蔵)



◎体験型イベント「キッズミュージアム2024」を開催

体験学習を通じ、楽しみながら歴史や考古学に触れる



8月1日・2日、千里山キャンパスの関西大学博物館にて、夏休み恒例の「キッズミュージアム2024」が開催された。

本イベントは、地域の小学生を対象とした体験型イベント。歴史や考古学を体験することができ、夏休みの自由研究としても子どもたちに人気がある。

1日目のプログラムは「縄文タイルをつくろう!」、「扇面に絵を描こう!」。縄文タイル作りでは、学芸員から縄文時代についての説明を受けた後、粘土に縄目を付ける道具の原形を使って模様を付けたり、貝殻や竹管を利用して押型を刻んだり、それぞれの縄文タイルを完成させた。その後は博物館の展示室で、学芸員の解説を聞きながら実物の考古学資料を見学した。



縄文タイルをつくろう!

また、扇面に絵を描く体験では、学芸員から扇子の構造や歴史などについて話を聞いた後、15cm



扇面に絵を描こう!

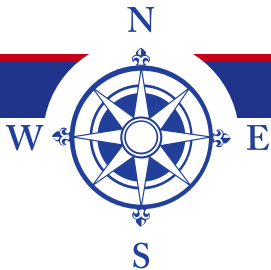
ほどの真っ白な扇面に思い思いの絵を下書きし、顔料で色付けをしてオリジナルの扇子を完成させた。

続く2日目のプログラムは「拓本をとろう!」、「埴輪をつくろう!」。拓本作りでは、専用の道具を使って瓦の模様を紙に写し取るなど、実際の考古学者のような体験に目を輝かせながら挑戦。埴輪作りでは、本物の埴輪を参考にしながら、自分だけのオリジナルの埴輪作りに没頭し、一人ひとりの思いが詰まったユニークな作品を誕生させた。

埴輪をつくろう!



※写真は本人と保護者から、撮影と掲載の許可を得ています。



パリ2024オリンピック・パラリンピック

陸上・坂井隆一郎さんが100mに出場、100m×4リレーでは5位入賞



(写真提供:共同通信社)

7月26日～8月11日に開催されたパリ2024オリンピック競技大会において、陸上男子100m予選に出場した坂井隆一郎さん(2020年人間健康学部卒・大阪ガス)が10秒17の7組5着で、無念の予選敗退となった。

また、坂井さんは陸上男子4×100mリレーの決勝にも出場。1走を担い、持ち前の鋭いスタートから好位置で2走につないだ。日本はシーズンベストタイムの37秒78をマークし、メダル獲得には及ばなかったが5位入賞を果たした。

セーリング・西田カピーリア桜良さんが混合ナクラ17級に出場

パリオリンピック・セーリング混合ナクラ17級において、西田カピーリア桜良さん(総合情報学部4年次生)・飯東潮吹さん(西田さん提供)のペアが出場した。



西田カピーリア桜良さんと飯東潮吹さん(西田さん提供)

会場となる港湾都市マルセイユで競技に臨み、総合17位でレースを終えた。上位10組によるメダルレース進出はなかったが、連日地中海の波と風を受けながら熱戦に挑み、確かな足跡を残した。

ヨットは5歳から始め、「スピードが魅力」とこの種目に取り組んできた。パリオリンピック最終選考大会で好成績を収め、初のオリンピック出場を決めた。

和田伸也さんがパラリンピックに出場、5000m(T11)で4位入賞

8月28日～9月8日に開催されたパリ2024パラリンピック競技大会に、東京大会でも複数メダルを獲得した視覚障がい者陸上競技の第一人者、和田伸也選手(2002年社会学研究科卒・長瀬産業)が出場した。男子5000m(T11)で4位、男子マラソン(T12)では9位となった。マラソンでは前回東京大会と同じ順位だったが、視覚障害の重いクラスのT11での記録としては、自らの持つパラリンピック記録を更新する2時間29分59の好タイムで走り切った。



力走する和田選手(左)とガイドランナーの長谷部匠選手(写真提供:共同通信社)

大阪天満宮・天神祭の船渡御に、今夏も「関大丸」が出航



7月25日、日本三大祭りと呼ばれる天神祭のクライマックスを飾る船渡御に、関西大学は奉拝船「関大丸」を出航させた。「関大丸」の出航は今年で16回目。校友や7か国からの留学生などさまざまな年代の約160人が乗船し、他船や沿道の人々と「大阪締め」を交わした。応援団の演舞によって船上はさらに活気に満ち溢れ、奉納花火に酔いしれながら、乗客全員がオール関大で関西大学のますますの発展を祈念した。



社会安全学部・平井登威さんが「Forbes JAPAN 30 UNDER 30 2024」に選出



(写真提供:Forbes JAPAN)

平井登威さん(社会安全学部4年次生)が経済誌「Forbes JAPAN」主催の「Forbes JAPAN 30 UNDER 30 2024(「世界を変える30歳未満」30人)」に選出された。次世代をリードする各国の若い才能30人に光をあて、応援するプロジェクト。平井さんは精神疾患の親を持つ子ども・若者を支援する団体「CoCoTELL」を立ち上げ、2023年にNPO法人化。オンラインでの相談活動などを展開している。

「関西大学デジタルアーカイブ」が「デジタルアーカイブジャパン・アワード2024」を受賞

8月26日、国立国会図書館・内閣府が主催の「デジタルアーカイブフェス2024」が開催され、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)が運営する「関西大学デジタルアーカイブ」が「デジタルアーカイブジャパン・アワード2024」を受賞した。



「関西大学デジタルアーカイブ」は「研究リソースのオープン化」をコンセプトに、大学図書館並びに研究者が所蔵する幅広い資料を収録。信頼されるデジタルアーカイブに向けた取り組みを多数行っている点が高く評価された。

体育会サッカー部の川島功奨さんが鹿児島ユナイテッドFCに入団内定

2025年シーズンより、体育会サッカー部の川島功奨さん(社会学部4年次生)がJリーグ・鹿児島ユナイテッドFCに入団することが決定した。川島さんのポジションは、ミッドフィルダー(MF)・ディフェンダー(DF)。得点、アシスト、守備でも力を発揮する。秀でた戦術眼と豊富な運動量、正確なキックを武器に、今後の活躍が期待される。



(写真提供:関大スポーツ編集部)

